

ホトギス

「週末寸言」原稿 20110514

「卯の花の、匂う垣根にホトトギス、早も来啼きて・・・」
（『夏は来ぬ』作詞佐々木信綱）。この小学校唱歌が思わず口を突いて出てくる好い季節になりました。

ホトトギスを漢字であてる
と時鳥・郭公・杜鵑・不如帰・
子規など多くの当て字があり
ます。別名も多く、あやめどり文目鳥・

いもせどり妹背鳥・たそがれどり黄昏鳥・たまさかどり偶鳥・卯月

鳥・かんのうどり早苗鳥・かん勸農鳥等々。どうしてこんなに沢山の呼び名があるのでしょうか？

中でも不吉なのは・たまむかえどり魂迎鳥・

しでのたおき死出田長など何れも「死」に関わる呼び名です。ホトトギスは、暗夜にも活動する上に「トツキヨキヨカキヨク」と啼くあの鋭い鳴き声が血を吐いて死ぬ末期の結核患者の吐血を連想させたのでしよう。

徳富蘆花の名作「不如帰」は、結核に罹ったヒロインの若い妻・浪子と夫・武男の悲

しい別れを描いて一世を風靡しました。「ああ、人間はなぜ死ぬのでしょうか。生きたいわ！千年も万年も生きたいわ！」という名セリフは、明治末期から大正・昭和の戦後まで、世の人々の紅涙を絞り出させたものでした。

明治22年5月9日、歌人・俳人・小説家の正岡升は結核が原因で初めて吐血しました。「卯の花をめぐってきたか時鳥」。これを機にペンネームを正岡子規と改め、以後余命を削りつづけながらあの膨大な作品を専ら病床にあつてもものしていきました。正岡子規にとってホトトギスは卯の花ではなく、自分の処へやって来た死の使いでした。その卯の花が散るとき、自分も死ぬことを子規はこの時予感しています。「卯の花の散るまで鳴くか子規」。

実際、子規の結核菌は文字通り「病膏背に達し」、脊髄力リエスを併発して、体中から膿が噴出するという最悪の病状を呈し、この日から13年後の明治35年9月17日早晩死去、享年34歳。辞世の句は「へちま咲いて痰の詰まりし仏かな」。痰が詰まって、もはや「トツキヨキヨカキヨク」と啼けないホトトギスで

した。

食いしん坊の子規が最後に

口にしたのは甲州葡萄10粒、

「何とも言えぬ旨さであつた」

(『病床六尺』)。